



学校教育目標『つながる 続ける 創り出す』

令和6年1月22日
横浜市立三ツ境小学校
学校長 飯田 雅人



三ツ境小だより 2月号



「言葉を大切に」

副校長 矢島 祥子

令和6年は厳しい年明けとなりました。多くの人が、何かできることはないかと考えているのではないのでしょうか。第102回 全国高校サッカー選手権大会で、石川県代表の星稜高校は地元からの応援団の来場が不可能となり、関東在住のOB・OGやすでに敗退していた日大藤沢高校のサッカー一部員らが同校スタンドから温かい声援をおくったり、対戦相手の市船橋高校がメガホンを貸し出したりして協力したというニュースを見ました。自分にできることを真摯に行い、一日一日を大切に生活しようと思いました。

先日、3年生が国語の学習で「三年とうげ」の音読をしていました。(おじいさんは、)「ころりん、ころりん、すってんころり、ぺったんころりん、ひょいころ、ころりんと、転びました。あんまりうれしくなったので、しまい、とうげからふもとまで、ころころころりんと、転がり落ちてしまいました。」リズムの良い歌が繰り返して出てくるところが、子どもたちには面白く感じられる単元です。低学年で学習する「大きなかぶ」の「うんとこしょ どっこいしょ」や「おむすびころりん」の「おむすびころりん すつとんとん」など、民話や昔話の多くに当てはまる組み立てです。

さて、5年生の国語の教科書には「言葉の意味が分かること」という単元があります。作者は、子どもを対象にした研究結果をもとに、言葉の謎に迫る発達心理学者である今井むつみさんです。「単語も文法も知らない赤ちゃんはなぜ、言葉を使いこなせるようになるのか」について今井さんは、こう述べています。

言葉を習得していく過程で大きな役割をするのが、オノマトペ(擬態語や擬音語など)です。ずるずる、つるつる、ドタン、バタンなど、小さい子はオノマトペが大好きです。たしかに、「もぐもぐしよう。」「ポイしよう。」など、2歳児くらいまでは、大人もオノマトペで子どもに話しかけます。小さい子には「うがいしよう。」よりも「ガラガラペっしよう。」といったほうが、感覚的・身体的に分かりやすいからでしょう。これは最近注目の対話型AIとは全く違う言語習得法です。赤ちゃんは、周りにあふれる情報から、まずは必要な情報を取り入れ、それを身体的感覚に紐づけながらじっくりと言葉を増やしていくのです。赤ちゃんは、新しいものを食い入るように見たり、耳をそばだてたりしています。新たな語彙を習得する能力は未知への好奇心も関係しています。その学びには、大人たちの働きかけも大切です。映像を見せて多すぎる情報を与えるだけ、一方的に伝えるだけでは生きた知識にはなりません。(2023年9月22日 読売新聞 夕刊より)

3年生の「三年とうげ」では、登場人物の気持ちの変化を捉え、様子や行動、気持ちを表す語句の量を増やして会話や文章の中で使えるようになることを目指しています。言葉から受け取る感じを話し合ったり、動作化したりしながら言葉の意味や効果などを考えていくことで生きた知識になり、登場人物の気持ちをより詳しく想像することができるようになるのです。

その日の夕方、校舎内を歩いていて素敵な表現を見付けました。

○あいさつのときは しっ ピタッ よいせい (2年生の学級目標から)

○秋は 栗がよい 栗ごはんになると よいにおいが鼻に ふわっとくる (5年生 季節の詩から)

「ピタッ」「ふわっと」という言葉が効果的に使われています。様子や気持ちをうまく表現しているなど感心しました。

これからも言語活動を大切に、他者とのコミュニケーション力を育てていく教育活動を全職員で進めてまいります。保護者の皆様、地域の皆様、今後も本校の教育活動へのご理解ご協力をよろしくお願いいたします。